

## 『ショパン全書簡』第2巻、第3巻

S・ヘルマン;Z・スコヴロンほか(編)、関口時正ほか(訳)

岩波書店  
2019.10,  
2020.12

### 全書簡第3巻の刊行を祝う

ショパンが書いた手紙や、ショパンが家族や友人、知人から受け取った手紙をすべて集めた『ショパン全書簡』の第3巻(原書第2巻[日本語訳では2分冊]の後半)が2020年12月に岩波書店から刊行されました。原書第2巻(ポーランド語以外の原語も含む)は2017年に刊行されましたので、約3年の時差を経て、日本語訳が姿を現したことになります。第3巻までの内容は次のとおりです。

【日本語訳】書簡の時期／収録数／ 原書刊行年／日本語訳刊行年
第1巻 1816～1831年 ポーランド時代／90通／ 2009年／2012年
第2巻 1831～1836年 パリ時代(上)／138通／ 2017年／2019年
第3巻 1836～1839年 パリ時代(下)／255通／ 2017年／2020年

どの巻も、索引を含めて約700頁の大部ですが、手紙だけでなく、写真、演奏会プログラム、地図なども含まれています。まさに、私たちが現在手にしうるショパンの主要な資料をすべてまとめたオムニバスであり、書簡集というよりも「ショパン事典」か「ショパン総覧」とも呼ぶべき大作になっています。しかしなお、この一大プロジェクトは完結したわけではなく、今後、日本語訳第4巻となる1839～49年の書簡集の原書第3巻が2022年か23年に刊行される計画で、さらに数年後に残りの巻の刊行が予定されているそうです。しかも、原書第3巻は日本語訳では3分冊になりそうで、想像もできないほど浩瀚な、全集のようなシリーズになるようです。

原書の編者は3名で、第1巻刊行時のプロフィールでは、ゾフィア・ヘルマン先生(ワルシャワ大学史学部音楽学科教授)、ズビグニェフ・スコヴロン先生(同)、ハンナ・ヴルブレフスカ=ストラウス先生(元フリデリク・ショパン博物館館長)です。

日本語版の訳者は、関口時正先生(東京外国語大学名誉教授)を中心に、ポーランド語通訳や翻訳、ポーランド音楽研究の分野で活躍する方々です。

### ショパン生誕 200 周年記念に

ポーランドで『全書簡』の刊行が企画された大きな動機は2010年がショパン生誕200周年に当たることですが、日本の事情からは、東欧革命を経た

1991年に東京外国語大学に「ポーランド語専攻」が設置され、ポーランド語を専門に学べる体制が確立されたことの一つの大きな成果が、この訳業に現れているように思われます。

とくに原書編者のお一人のスコヴロン先生には、日本語訳第1巻刊行後の2013年10月に札幌で講演していただきましたので、この度の日本語訳第3巻の刊行には特別な感慨を覚えます。札幌でお会いしたとき先生に刊行計画を伺ったところ、15年のショパン国際コンクールに合わせて原書第2巻、その次の20年のコンクールに合わせて第3巻を刊行予定と話されていたことを記憶していますが、日本語訳第3巻の刊行が奇しくも2020年になりました。あらためて、この一大プロジェクトに取り組まれている関係各位に敬意を表したいと思います。

折しも、この原稿を執筆している2021年7月現在、ワルシャワでショパン国際コンクールの予選が開催され、日本からの出場者14人が予選を通過しました。20年に予定されていたコンクールがコロナ禍により延期され、本選は今年10月に行われます。

### 全書簡の翻訳出版は日本のみ

「訳者後記」によれば、この全書簡がポーランドの外で翻訳されたのは今のところ日本だけ、つまりショパンの手紙を完全に読めるのはポーランド語と日本語だけで、英訳も仏訳も計画はなく、米国でも翻訳は断念されたそうです。スコヴロン先生は米国で仕事をされた経験もある学者ですが、おそらく先生ご自身が働きかけても、米国での翻訳はかなわなかったのでしょう。本翻訳プロジェクト、つまりショパンの全貌を言語資料でとらえ尽くす作業が、いかに困難かを想像させるエピソードです。

かつてポーランドの評論家イェジー・ヴァルドルフは、たとえショパンが1曲も作品を残さなかったとしても、書簡の名文だけで後世に名を残しただろうと評しました。筆者も、ショパンの音楽に劣らず文章が好きですが、とくに1840年代の晩年の手紙に心を惹かれます。そうした手紙は次の巻に収められますので、その刊行を心待ちにしています。

(三浦洋、北海道情報大学教授、本会運営委員)

